

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：82702

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07488

研究課題名（和文）鎌倉～南北朝時代におけるやまと絵の様式展開に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on YAMATO-E in from the late Kamakura period to the Northern and Southern Dynasties period

研究代表者

橋本 遼太（HASHIMOTO, Ryota）

神奈川県立歴史博物館・学芸部・学芸員

研究者番号：20782840

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、鎌倉時代～南北朝時代におけるやまと絵の様式展開について考察することを目標とした。制作年が明らかになっている基準的な作例（おもに絵画）を中心に作品調査を実施し、法量の測定、絵画技法の目視による観察等を行った。調査対象作品のジャンルは、仏画、垂迹画、肖像画など多岐にわたった。この多様性は本研究課題の特徴ではあるが、それゆえに、考察を行うための十分な調査数を研究期間内に確保できない結果にもなった。本研究で掲げた課題は、「鎌倉～南北朝時代における絵所の並立と絵師の交流をめぐる調査研究」（18K12251）で継続して検討することになる。

研究成果の概要（英文）：The object of this study shall be an examination on the style of YAMATO-E from the late Kamakura period to the Northern and Southern Dynasties period. I picked up the definite works of production year, and I observed the technique and measured the sizes of the works. The theme of the works ranged widely over a Buddhist painting, Shinto paintings and portraits. Although the diversity of the theme is the strong point of this study, I didn't observe enough numbers of the works as a result. I will carry this research over to the new subject; 18K12251.

研究分野：日本美術史

キーワード：美術史 絵巻 肖像 鎌倉 禅律

1. 研究開始当初の背景

日本の中世絵画史研究は、13世紀の絵画をめぐっては六道絵をはじめとする仏画研究が加須屋誠氏や山本聡美氏により近年盛んに行われ、また15世紀の絵画をめぐっては高岸輝氏による初期土佐派関連の研究、相澤正彦氏による室町時代の土佐派に関する研究などが継続して行われているが、そのあいだにあたる14世紀の絵画研究は従来関心が払われてこなかった。その要因としては主に二つの理由が挙げられる。第一に南北朝の動乱に伴いそもそも現存作例が不足していること、また第二に前後の世紀と異なり、複数の絵師集団が乱立した状況にあるため、全体を見通すことが容易でないこと、である。しかし、現存作例が不足気味とはいえ、銘文や画賛、奥書等により制作年の確定できる作例も少なからず存在する。これらの基準作例を軸に調査研究をおこない、14世紀絵画史に一定の見通しをつけたいと考え、本研究を企画した。

研究代表者はこれまで鎌倉時代後期、14世紀の初頭に活躍した絵師である高階隆兼の伝記的研究を継続して行ってきた。その中で隆兼が、平面の絵画のみならず、獅子狛犬や神像彫刻といった立体物への彩色を行っていたことを明らかにした(橋本遼太「高階隆兼の画業再考 彫像への彩色について」『待兼山論叢 美学篇』第48号、1~22頁、2014年)。すなわち、絵画、彫刻、工芸などといった近代以降の美術制度の枠組みでは把握しきれない活動を当時の絵師は行っていたのである。この知見はジャンル別で研究対象を細分化する現代の美術史研究の弱点を指摘することにつながった。たとえば「土佐派の絵画」のように、ある絵師集団の系譜に沿って、かつ作品の形態

別でみる議論も重要だが、ときには絵師集団や作品形態の垣根を超えて作品を観察する眼が必要であると痛感するに至った。

また、14世紀の絵画史研究を進めるにあたっては、京都や奈良だけでなく、当時最新の外来文化の受容地であった鎌倉地域をも含めて、人物や文物の交流を把握する必要性があることを念頭に置いて研究に着手した。

2. 研究の目的

絵画様式の展開を考察するにあたり、便宜的に4つの作品群(後述)を想定し、各群のあいだで相互に絵画様式の比較検討を行うこととした。たとえば、肖像画の場合、像主の概形の一致は制作に利用した紙形(本画を制作するためのサンプルともいべき下絵のこと)を他の地域と共有していたと判断でき、結果として人物交流の事実を裏付けるかまたは翻って人物交流の事実そのものを指摘できると想定した。そして紙形を共有したうえでの細部表現の違いは筆を揮った絵師の違いに帰着できるだろう。このように制作主体の異なるだろう4つの作品群について、相互に様式比較を行うことで、絵師の活動の範囲(地域差)を推定し、なおかつ、同一群内で制作時期の異なる作品間の比較を行うことで、時代による様式の変化(時代差)を考察することとした。

3. 研究の方法

徒に調査対象を拡げ分析が困難になる事態を避けるため、基準作例のなかから

制作地別にいくつかの資料群を選定した。想定したのは以下の4つの資料群である。第一に京都天龍寺系の禅宗寺院、第二に高階隆兼を中心とした宮廷絵所、第三に興福寺を中心とした南都絵所、第四に鎌倉地域を中心とした律宗寺院。これら各群で共通して基準作例を有する画題（肖像画、仏画）を軸に分析対象作品を確定し、データの収集を行う。熟覧の許可が得られた作品については調査に出向き、法量等の基礎データの収集、デジタルカメラによる高精細画像の撮影を併せて行う。

また、分析対象の作品について、絵画の特徴の把握、そして制作に関与した人物とその思想の整理を行う。その際、絵画資料だけでなく、文学や文芸から日記文献まで幅広い史料を参考に、多様な人物相関や多面的な思想背景を把握するように努める。

4. 研究成果

便宜的に設定した作品群のうち、2群と4群に関わる作品として、春日本迹宮曼荼羅（東京 静嘉堂文庫美術館）、春日本迹宮曼荼羅（静岡 MOA 美術館）、春日鹿曼荼羅（静岡 MOA 美術館）などの調査機会を得た。春日鹿曼荼羅（静岡 MOA 美術館）に注目した理由は、鹿の背の上の円鏡内に描かれる春日一宮釈迦が説法印をとるからである。春日一宮釈迦が同様の説法印をとる春日明神影向図（大阪 藤田美術館、1312年、高階隆兼筆）の作品研究を継続する研究代表者にとって MOA 本は比較検討すべき重要な作例である。MOA 本に描かれる四宮本地の十一面観音が長谷寺式であらわされること、そして長谷寺式十一面観音は西大寺流律僧から

信仰を集めたこと、忍性が開山となった鎌倉極楽寺の釈迦如来坐像も同様の説法印をとることを重視し、MOA 本や藤田本の制作には西大寺流の律僧が関与したと推定した。ただし、釈迦に説法印をとらせる意味については考察が及ばなかったため今後の課題としたい。

そのほか、仏涅槃図（東京都台東区 長寿院、1331年、助法橋尊有筆）、虎関師錬像（和歌山県西牟婁郡白浜町 草堂寺、1346年）等の調査も実現したが、制作主体などの具体的な考察に関しては後考を期すこととなった。

また、本研究課題に着手した時点では想定していなかったが、研究期間中に研究対象に浮上した作品もある。すなわち、研究代表者の所属機関で保管管理している仏涅槃図（横浜 寶生寺所蔵、南北朝時代）がそれである。寶生寺本の仏涅槃図は、肥瘦に富む伸びやかな描線の特徴とする作品で、その制作は南北朝時代にさかのぼると考えられる。経年により画面に折れが散見され、また表具類にも脆弱な点が生じる状態であったため、平成29年度（本研究課題の最終年度にあたる）に本格的な解体修理を行った。その過程で、軸木内から、過去複数回にわたって修理が施されていることを示す墨書が発見された。この発見は本研究期間の最終年度であったため、本格的な報告は今後の課題だが、簡潔に発見の内容を記すと、都合3回にわたる過去の修理銘が見いだされた。具体的には、

明応7年（1498） 鎮誉（6代）による修理銘

寛永14年（1637） 快弁（13代）による修理銘

天保6年（1835） 實尊（26代）の頃の修理銘

の3件である。 の銘文で鎮誉は、その

修理が「寶生寺門徒」の「合力」でなされたことを記している。この銘文の重要性は、寶生寺本が遅くとも15世紀末の時点で寶生寺に伝来していたことを示す点にある。詳細は今後公開する修理報告に譲るが、寶生寺本は鎌倉宝戒寺本の仏涅槃図（南北朝時代、神奈川県指定重要文化財）に図様のみならず描線の質まで酷似すると研究代表者は見ており、この度の修理に伴う新発見は、寶生寺本だけでなく宝戒寺本の制作地や制作主体に係る問題、またひいては両本に大きな影響を与えたと考えられる鎌倉円覚寺本（鎌倉時代、国指定重要文化財）の規範性の問題にまで発展しうる、重要な情報であると考えている。修理報告を兼ねた銘文の紹介は今後公刊する予定である。

5 . 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

橋本遼太「寶生寺本尊大日如来像に納入された寶生寺所蔵の仏画」『横浜の元祖寶生寺』神奈川県立金沢文庫、2017年、pp.14-15

〔その他〕

ホームページ等

<http://ch.kanagawa-museum.jp/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

橋本 遼太 (HASHIMOTO Ryota)
神奈川県立歴史博物館
その他部局等, 学芸員
研究者番号 : 20782840